
一秒一秒

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一秒一秒

【Nコード】

N23080

【作者名】

刹那

【あらすじ】

昔の恋と今の恋。

正解を見つけれず、彷徨い。

君を悲しませた。

中途半端な俺の恋愛ストーリー。

（前書き）

いやあ、今回ばかりは難しかったですね

実体験、元の作品はむずいっす。

とても離れた場所から君の声を聞いていた。
透き通ったその声は、無垢の色しか映っていないくて。
俺はその声に聴き惚れていた。

出会いはネットだった。
別に出会い系とかではなく、書き込み掲示板的なサイトで。

最初は掲示板だけで話す関係で……。
無性に気があって、話が弾んで。
掲示板だけじゃなくて、ケータイでの連絡も取り始めて、いつの間にか俺は君に夢中だった。

学校から帰れば、すぐにケータイを見て。
いつも、絶対に「受信メール一件」の表示が待ち受けにされていた。
て。

その度に笑みが溢れた。

恋に疎い俺は自分の感情に気付いていなかった。
いや、気付こうとしていなかったただけかもしれない。
昔の過ちを繰り返すことが怖くて。

俺の初恋は、君との出会いと重なっていた。
友達からメルアド聞いて、メールして、いつの間にか気があって。

君ほど遠くにいないから、会うことは容易かった。

でも、いつからだろうか。

想いを伝え合い、一つになったはずだったのに。

俺と初恋の彼女はいつの間にか心まで離れ離れになっていた。

きつと、そのことを怖がっている。

君が語ってくれた失恋の話を思い出し。

さらに身を縮ませた。

君と話していると、本当に会ってみたくなくて。

長い旅路を自転車で越えると言ったら、必死で止めてくれた。

俺を心配してくれている。そうわかって嬉しくなった。

結構、順調に進んでいた俺等の関係。

でも、簡単には進ませてくれなかった。

その第一関門が母だった。

母は、昔の俺の恋愛自然消滅のことを心配して、「深入りするな」と言ってきた。

メル友ならメル友らしくしてろ。

こんな言葉で今まで、怒った事なんてなかったのに、なぜか無性に腹がたった。

次第に母との関係は悪化。

君はそのことに責任を感じているのか、よく謝ってきた。

俺の不甲斐なさで君が悲しんでいる。そう思うと胸が痛んだ。

母との対峙決戦3回目を迎えた時、母は俺に君へ恋愛感情を抱いているのかと聞いてきた。

俺はわからなかった。さっき話したように気づいていなかった。
だから、一番、聞いてはいけない相手なのだろうが、自分では抱
えきれず君に話してしまった。

君はきつと戸惑ったと思う。

好きかもしれないと急にいわれるのだから。
でも、君は真剣に俺と話しあってくれた。

好きなんだと実感したのは、君が言った恋という決定的な物だっ
た。

5つ例が上がって、俺はそのうち3つ当てはまった。

君は「一つでも当てはまれば好きって事なんだよ」と教えてくれ
た。

これで、分かったんだ。

俺の君に対する想いが。

でも、昔感じた恋とは別の違和感があった。

なにかが違った。

それがわからない。

昔の恋が勘違いなのか、今の恋が勘違いなのか、突き止める術は
なく、俺は頭を悩ました。

俺の気持ちは一体どこにあるのか。

そう思うと、急に自分が情けなく思えた。

なんで、自分の感情を君の力を借りて見つけようとしたのか。そ
れはきつと。

君にこの気持ちを伝えたかったからなんだと思う。
遠くにいる君に、遠くにいる俺が。

だから言おうと決めた。

告白するに当たって必要な覚悟。それが俺には不足していた。絶対に幸せにできるのか、守り続けられるのか。完璧と呼べる覚悟が存在しなかった。

このままでは言えない。

そう思ったがふと思い出した。

昔の恋愛自然消滅の事を。

あの時の失敗を俺は間違っ理解していた。
恋したことが間違っていたんじゃないかって、覚悟しようとしていなかった事が間違いだったんじゃないかと。
だから、いつの間にか離れ離れになったんじゃないか。

もし、そうなら、俺は覚悟を少しずつで良いから決めて行けばいいんじゃないか。

そんな半人前以下の俺の想いを君は受けとめると言ってくれた。
しつかり返事すると言ってくれた。

だから、想いを一つの言葉にし君に届けた。

「覚悟もまだ出来てなくて、生半可な俺だけど、
こんな俺でも、好きになっていいですか？」

覚悟が足りない。

でも、君は受け止めてくれるか。
それを聴くために俺はそう言った。

「そんな告白ずるい」と君は言っただけ。
しつかり俺の気持ちに答えてくれた。

「本当に、私のこと好きになってくれるなら、私はそれに答えるよ！」

めちゃくちゃ一途だから後悔せんといてね」

受け止めてくれた。

それが嬉しくて嬉しくて。

そつと触れた頬は濡れていた。俺は泣いていたんだ。

未だに第一関門‘母’は超えられていない。

でも必ず、超えてみせる。

君のためなら命を賭けれる。どんな関門も超えていく。

体は離れど、心はすぐそばにある。

だから、寂しがらずに待っていてほしい。

俺が向かえにいく日を。

時は流れていく。

君に会える日は着々と近づいている。

一秒一秒。

長い。そう思ったらダメ。

もう少し。そう言い聞かせて。

近い将来、俺らは出会える。その時間は着々と近づいている。

一秒一秒。

出会ったら、その先は二人で進む。

一步
一秒

一步
一秒。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2308o/>

一秒一秒

2010年10月10日15時30分発行